

平成17年3月31日発行

狛江市和泉本町1-1-5

電話 (3430)1111

狛江の庚申講

十干十二支の組みあわせの一つである庚申^{かのえさる}にあたる日には、特殊な禁忌や行事が伝えられてきました。60日ごとにめぐってくる庚申^{こうしん}の日の夜、講の仲間が集まって庚申様をまつり、眠らずに夜をあかして長寿を願う行事は、庚申待ち、庚申講などと呼ばれています。

このような習俗は、もとは中国の道教の三尸^{さんし}説を起源とするものです。人の体にひそむ三尸という三匹の虫が、庚申の夜ごとに天にのぼって、その人の行いの過ちを天帝に告げるので、それによって寿命が定まり縮むのだといえます。そこで、その夜には、守庚申といって、眠らずに身を慎んでいると、三尸の虫が体内から抜け出せないで、無事に長生きできるというわけです。この三尸説および守庚申の習俗は、わが国には奈良時代に伝えられ、平安時代になると宮廷貴族によってさかんに行われます。さらに時代が下るにつれ、仏教や修験道、神道などと習合し、庚申待ちの習俗として民間にも広まりました。それとともに、もともとは夜ごもりの慎みを中心であった庚申信仰に、庚申様という特定の神仏が想定されて信仰の対象となります。時代や地域により、いくつかの神仏がみられますが、江戸時代には青面金剛^{しょうめんこんこう}が庚申様の本尊としてまつられることが多くなっています。青面金剛に悪病の予防治療を祈るところから、三尸の虫封じと結びついて、庚申様の本尊は青面金剛とされるようになりました。なお、江戸時代中期以降、猿田彦神を庚申様とする神道の説も加わって、道祖神信仰との結びつきもみられます。

江戸時代の農村でもさかんになった庚申信仰の広まりは、狛江では市内の旧6か村の路傍や寺や墓地、神社の境内などに残る25基の庚申塔によって知ることができます。庚申待ちの記念、供養のために造立されたという庚申塔は、講中によるものが多くみられます。多摩地方で最も古いとされている、岩戸の慶岸寺の墓地にある地藏像が刻まれた庚申塔は、その一つです(寛文2年<1662>造立)。これよりのち貞享3年(1686)、講中20名により造立された泉龍寺境内の庚申塔は、烏帽子姿の1匹の猿を本尊とした一猿^{いちえん}庚申塔です。青面金剛を本尊とする庚申塔は、この20年ほど後に造立されています(山谷の庚申塔)。

市内に残された庚申塔から、江戸時代には狛江の各村に庚申講があったと思われるが、いまでは和泉の一部だけに伝わる行事になっています。

和泉の上南、山谷、松原、原などでは、いまでも、庚申講が形を変えて続いています。

上南(上組・南組) 上和泉庚申講。昭和40年代に、昔からの庚申講を、「親友会」と改称。平成17年現在の会員数22名。庚申信仰のうすれた親睦会ですが、2か月に1度、皆の集まりやすい土曜日の夜などに、会員の家を回りもちの宿(会場)にして、寄合いをしています。決めごとや連絡事項が話題の中心で、茶菓も出て世間話などしながら、しばらく時を過ごします。月掛け貯金をして、年に1度の会員旅行を計画したこともあります。いまでは、それも隔年のことになっています。信仰ぬきの親睦会とはいえないものの、青面金剛を描いた「お庚申様の掛軸」(オヒョウゴ)は、おおかたの会員の家々をまわっています。その当番になった家では、庚申、または申の日、あるいは都合のよい日を選んで、庚申様をまつてきました。座敷の床の間などに掛軸をかけて、お明かりや線香を上げ、お神酒、そばなどを供え、六郷さくら通りの水神前にある庚申様(青面金剛塔)にも、同じ供え物をします。近年まで、白い高張提灯一對を庚申様の両わきに立てていました。一夜のまつりがすむと、掛軸、講帳など一式を次の当番の家に渡します。

青面金剛像の庚申塔は、「和泉村上講中十九人」により寛政6年(1794)に造立。六郷用水の埋立てによる道路改修以前には、現在地の東方100m近くの三叉路にあって、そこは庚申塚と呼ばれていました。この庚申塔は二度の盗難にあい、その後、現状のようなコンクリートブロックの小堂に納め、鉄格子の扉に施錠をして、保護しています。昭和46年、水神前に遷座した当時の講員数は28名でした。

かつての庚申講(お日待ちとも呼ぶ)には、かならずソバ(うどんのこと)をつくったもので、宿となる当番の家の者がお日待ちの3、4日前に各家をまわって小麦粉1升ずつを集めます。当日、ソバを打つのは当

番の男たちでした。^{うわばん}上番（前の当番）と、その月の当番、それに^{かばん}下番（次の当番）の人たちでつくります。お日待ちでは、一同で庚申様を拝み、その後お神酒をいただき、野菜の煮しめや天ぷらなども出て、ソバがご馳走の宴となります。この夜は、クミアイの決めごとをしたり、農作物の作柄などを話しあったり、また、世間話に花が咲きます。「話は庚申の晩」で、ふだん長話しをしていると、「長話するなら庚申の晩（「お日待ちの晩」とも）にやれ」などと、よく言われたものでした。この夜は、ジッケッコウと呼ばれる無尽も行われ、くじに当たると、そのお金で肥料や農具を買うとか、ずいぶん助かったこともあったそうです。一人10銭ずつ出しても当時の1円といえ、大したお金でした。ジッケッコウは花くじともいい、割竹を削った竹べらに番号と金額を記したものを人数より1本だけ多く箱の中に入れ、振り出して当てるくじです。庚申講には、このような経済的な相互扶助の意味もありました。

お日待ちといっても、12時ごろまでにはお開きになったもので、明治24年生まれの人でも、朝までという経験は知らず、12時過ぎれば庚申の日ではなくなるので、よいのだといいます。なお、庚申の夜は、特に身を慎むもので、この夜に授かった子は盗人になるとさえ言われました。

忙しくなる6月からの農繁期には、掛軸はまわっていましたが、庚申のお日待ちもせず、集まるのは年に2、3回ということもありました。また、「寒庚申」といって、寒中の庚申は、避けるものだといいます。

山谷 昭和33年ごろまでは、昔ながらの庚申講があって、講中は18名。庚申講は庚申待ちともいい、ソバ（うどん）をよく食べるので「ソバっ食い」とか、食い講とも呼ばれていました。庚申待ちの日には、その月の当番の宿で、^{さきばん}先番（上番とも）と^{あとばん}後番（下番）の人も手伝って、各家から1升ずつ集めた小麦粉でソバを打ち、まず、山谷の人たちでまつる庚申様（中和泉五丁目）に供えます。庚申様には、庚申講と書かれた提灯を一つ、下げてきました。庚申様は青面金剛塔で、宝永元年（1704）と文化元年（1804）の2基が、平成5年に完成した銅板葺きの庚申堂に納められています。宝永元年の庚申塔には「同行三十壺人」、文化元年のものには11人の名がみられます。庚申様の境内には、講仲間共用の膳椀などを収納しておいた、講小屋とか講椀小屋とか呼ばれる小屋が残されていて、いまでは地域の行事に使われる子ども会の神輿なども収納されています。

山谷では、庚申様の掛軸は伝えられていませんが、花くじの名もある、相互扶助の無尽、ジッケッコウは、庚申待ちには付きものでした。昭和32年の『庚申講無尽帳』も残されています。

庚申講を中止した昭和33年ごろは、テレビの普及しはじめたころで、茶の間での新しい娯楽もできたり庚申講は休もうじゃないか、ということになったのです。ところが、昔からの農家だけの寄合いは他にはなく、ムラづきあいの決めごとなどにも不便なので、親睦をはかる意味でも庚申講を復活しようという声があがり、昭和55年、庚申講の仲間が集まります。それ以後、親睦会として、ひと月おきに寄合いが持たれたこともありましたが、近年は年に1回、10月か11月にくる庚申の日などに、庚申様にお参りしてから、講仲間のそば屋などを宿にして集まるようになりました。

松原 松原の庚申様といって親しまれている庚申堂には、霊験あらたかとされてきた西向き庚申など、5基の庚申塔が納められています。ここでは、40年ほど前から、毎年4月8日の昼前に、お堂の前で泉龍寺の住職による供養が行われています。主催者は松原庚申講中。供養のあとは、近くに設けられた会場で、お神酒をいただき、茶菓で歓談します。現在、参加者は70名ほど。この催しでは、農協の松原支部の人たちが、だいたいな役目を受け持っています。毎年、4月8日のお釈迦様の日に集まるようになったのは、道路改修などで近辺の庚申塔や地蔵像などを庚申堂の地に移し、供養をおこなったことからでした。それを機縁に、現在の松原庚申講が発足しています。

いまでは庚申待ちの伝承をきくことはできませんが、庚申堂に納まる寛政12年（1800）の庚申塔には「当村講中十二人」とあり、また、明治10年代に造立したものには、15人が名を連ねていて、庚申講が行われていたことを、うかがわせます。

原 ここには庚申塔はありませんが、いまでも庚申様の掛軸が、講中の家々をまわっているのが、当番の家では庚申の日（都合が悪ければ申の日）に、お明かり、お神酒、そばなどを供え、線香を上げてまつります。宿に集まってソバ（うどん）を食べ、庚申待ちをしたのは昭和17年ごろまでで、戦争中、お神酒も食べる物も不自由になって中止。戦後、掛軸をまわして家ごとにまつるようになりました。その掛軸も傷みがひどくなったため、昭和60年に新しい掛軸に替えました。箱書きには、講中10名が記されています。庚申待ちが行われていたころには、庚申講中8軒とっていました。（狛江市文化財専門委員 中島恵子）